足立間税会　会長賞

「支えられてたことに気づいて」

足立区立 第十二中学校

三年　北舘　実

幼稚園生だった頃の私は「税金」という言葉を知りませんでした。韓国で髄膜炎になり入院したあの日も、「早く元気になりたい」と願うことしかできませんでした。しかし、中学生になって税について学んだ今、あの日の安心も、多くの人の支えによって成り立っていたのだと気づきました。

私は日本と韓国、二つのルーツを持っています。毎年夏休みには韓国を訪れ、ソウルや慶尚道で家族と過ごしています。ある夏、突然高熱を出し、韓国の病院で髄膜炎と診断され、そのまま入院することになりました。当時は病気がどれほど危険なのかも分からず、不安でいっぱいでした。後から家族に聞いてみると、症状が重くなる前にすぐ診察や検査を受けることができ、早い段階で治療を始めることができたため、大事に至らずに済んだそうです。私は医師や看護師の方々、そして毎日付き添ってくれた家族に支えられ、無事に回復して日本に帰ることができました。

中学校で税について学んだ時、私は「あの時、なぜ私は安心して治療を受けることができたのだろう」と考えました。そこで調べてみると、日本では消費税が医療や介護、年金、子育て支援などの社会保障を支える大切な財源の一つになっていることを知りました。また、韓国でも税金や公的医療保険により、医療制度が支えられ、多くの人が必要な治療を受けることができる仕組みが

整えられています。

私はそれまで、税金は道路や学校をつくるためのお金だと思っていました。しかし、病気を経験した自分のことを振り返ると、その考えは変わりました。救急医療や感染症対策が行われていること、公立病院が地域医療を支えていることなど、普段は意識していないところにも税金は使われています。幼い頃の私は、それを当たり前と思っていました。でも、その当たり前は、多くの人が税金を納めて社会を支えているからこそ成り立っているのだと気づきました。

日本と韓国では税金や社会保障の制度に違いがあります。しかし、どちらの国にも共通しているのは、困っている人を社会全体で支えようという考え方です。日本と韓国、二つの国につながりがある私だからこそ、その違いだけでなく、支え合うことの大切さにも気づくことができました。

将来、私も税金を納める立場になります。その時は、「払わなければならないお金」と考えるのではなく、幼い頃の私が支えられたように、今度は私が誰かを支える側になりたいと思います。あの日、韓国で感じた安心を忘れず、社会を支える一人として責任を果たしていきたいです。